和歌山大学教育学部附属小学校

らいぶ LIVE 創 つくりえいたー CREATOR

NO.66
2013年6月
研究広報誌

学びをデザインする子どもたち
～つなぐ・つむぐ・つくる～

CONTENTS

●２０１３夏季教科領域別研修会のご案内……1
●複式研を終えて:「第１３回複式授業研究会を終えて」……2
●学習紹介（算数科）：学び合いのために大切にしたいこと……3
●学習紹介（理科）　:子どもたちが主体的に学び合う授業……4
●学習紹介（音楽科）:いつでもあの海は……5
●学習紹介（体育科）:体つくり運動 コンビネーションなわとび……6
●学習紹介（算数科）:作図の技能を養う活動……7
●学習紹介（図工科）:思いついたこと何でも言ってみよう……8

2013夏季教科領域別研修会 ～ご案内～

25日(木)

午前の部9:30～12:00	午後の部13:30～16:00
社会：今年度の社会科部の夏季研修は一味違います。“社会科だけでなくどの教科でも授業を見る視点が変わる”“２学期からの社会科の授業が楽しみになる”授業分析を中心にした学びのある研修会にします。	**理科：**本校理科部と和歌山市理科研究会からの実践報告をもとに，参加者と意見交流しながら進める予定です。日頃の授業実践における悩みを出し合い，明日の授業にいかせる会にしたいと考えています。
音楽：本年度も佐野靖先生（東京藝術大学）をお招きしています。『「比べる」ことでせまる音楽の魅力』の実践報告（江田・内垣・居澤）をもとに，「音楽科教育の課題と可能性」（仮題）について講演していただきます。	**家庭：**前半の部は６年生での１学期の取り組みから“朝食作り”“快適な生活”の実践発表を行います。後半の部では実際に「味噌作り」を体験していただきながら，手作りのよさについて考えたいと思います。
複式： 中学年理科の複式授業を公開します。３年「かげのでき方と太陽の光」４年「星のうごき」です。後半は津田修吾先生（元下神野小学校長）に複式授業での指導のポイントを中心に講演していただきます。	**体育:**本校の実践「器械運動・跳び箱（３年生）」「体つくり運動（1,6 年生）」について実践発表と実技を行います。運動のできる服装、体育館シューズをご用意ください。また林修先生（和歌山大学教育学部教授）を講師にお招きし，「体育の授業づくりのポイント」について講演していただきます。

○参加申し込みは，FAXまたは本校HP（→本誌8ページに掲載）でお願いいたします。
○当日は本校運動場が駐車場となります。（→正門左の通用門よりお入りください。）
○参加費は1. 000円となります。（資料代を含む）○再入場の際には，領収書をご提示ください。

26日(金)

午前の部9:30～12:00	午後の部13:30～16:00
国語：午前は本校国語部と和歌山市国語教育研究会からの授業実践の報告会，午後は西村充司先生（海南市立大野小学校教頭）による「わたしと小鳥とすずと」（金子みすゞ）の示範授業と研究協議会を行います。	
算数：午前は２年生と４年生の公開授業を行います。午後は池田敏和先生（横浜国立大学教授）をお招きして「子どもが豊かに表現し合う算数授業とは」について講演していただきます。	
生活：和歌山市生活科・総合教育研究会と共催して行います。実践発表（和歌山市・附属小）と，ご参会の皆様との意見を交流し，今後にいかすことができればと考えています。	**図画工作：**静かなブームのパラパラ漫画。誰しもノートに落書きをした覚えがあるでしょう。パラパラ漫画の進化系ソーマトロープやゾートロープなどアニメーションの原理となる作品にチャレンジしてみませんか。
	食育： 前半は和歌山市西脇小学校と附属小学校の食育指導の取り組みについて実践報告をします。後半は藤本勇二先生（武庫川女子大学）をお招きし『食の授業づくり』について講演していただきます。

※当日受付も行いますが，準備の都合上，事前の申し込みにご協力くださいますよう，どうかよろしくお願いいたします。

第１３回複式授業研究会を終えて

６月１５日（土）本校複式学級におきまして，第１３回複式授業研究会を行いました。今年も土曜日開催ということで，近畿各府県を中心に，遠くは北海道や静岡など，１００名近くの方がお越しくださいました。

公開授業Ⅰでは、１・２年生複式の算数科（１年生「たしざん」２年生「かくれた数はいくつ」）の授業と，３・４年生複式の理科（３年生「かげのでき方と太陽の光」４年生「1日の気温の変化」）の授業を行いました。

公開授業Ⅱでは，５・６年生複式の国語（５年生「百年後のふるさとを守る」６年生「森へ」）の授業を行いました。

１・２Ｆ算数科授業



１年生にとっては，初めての研究会。ちょっと緊張してるかな？？

３・４Ｆ理科授業



そして午後からの協議会では，まずワークショップを中心とした全体会を行いました。それぞれの学校の複式での取り組みや悩みなど，少人数で交流しました。子どもたちによる“司会”“記録”の仕方や授業に向かう姿勢など，教科を超えた子どもたちの育ちについて，率直な意見を交換することができました。短い時間ではありましたが，とても中身の濃い交流であったと思います。

引き続いて各教科の協議会では，教科を中心として，さらに活発に討議することができました。

皆様からいただいたご意見をもとに，今後も主体的に学び合う複式教育をめざしていきたいと思います。成長した子どもたちの様子を，１１月２日（土）の教育研究発表会２０１３においてご覧いただきたいと思います。ご参会ありがとうございました。今後とも，和歌山大学教育学部附属小学校複式部をよろしくお願いします。

午後の部　全体会より
今年も，複式授業での悩みや実践の工夫について，参会者の方々に交流して頂きました。



高学年の国語は，自分たちの読みを中心にして，交流をしていきました。

５・６Ｆ国語科授業



主体的に学び合う複式教育～学び合いの場を生み出すみとりと支援～

学び合いのために大切にしたいこと

算数科
1･2年F組担任
土岐 哲也



今年度の複式教育の研究テーマは「主体的に学び合う複式教育～学び合いの場を生み出すみとりと支援～」である。学び合うことは,複式学級だけにかかわらず,単式学級においても大切なことではないだろうか。

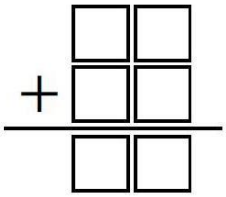
そこで,「学び合い」で大切にしたいことを考えてみた。次の3点である。

①焦点化によって全員参加を目指す　②双方向のコミュニケーション力を育む　③対等な関係をつくる

それぞれ,どういうことなのか以下で実践例を挙げながら述べてみたい。

1. 焦点化によって全参加を目指すこと

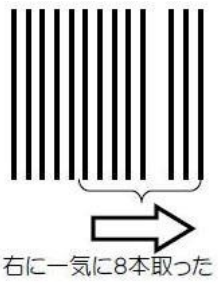
「焦点化」とは,一人一人の子どもたちに考えたいことが生まれ,それがみんな同じ方向を向いているということである。すなわち,学級の子どもたち全員が,その授業で明らかにすべき問題に向かっている姿ということであるである。2年生での筆算づくりの授業を例に挙げてみる。



右のような筆算の枠と,1から9までの数字カードを提示し,「この□の中に数字カードを入れて,正しい筆算をつくりましょう。」と投げかけた。この課題,正しい筆算はたくさんつくることができる。そこで,一番大きい答えになる筆算に焦点を絞り,考えさせよう考えた。そして,最後に「じゃあ,一番小さい答えになる筆算はどんなだろう。」と子どもの方から言わせたいと考えた。個人思考の場面では,「えー,難しそう。」と言っていた子どもたちも,試行錯誤しながら,正しい筆算ができてきた。発表の場面で,最初に指名された男の子は,39＋17＝56とカードを並べていた。次の子は,24＋35＝59と並べていた。そこで,「お,すごいね。難しそうって言っていたけどできているね。おや,答えが大きくなったなぁ。」と子どもたちに言った。「ぼくのはもっと大きいよ。」と言って,39＋28＝67とした。「おお,すごい。」と言うと,子どもたちは,「もっと大きいのができるかもしれない。」「やってみよう。」とカードを並べ始めた。このように,初めは,□の中に数字を入れて筆算をつくるだけの活動だったが,より大きな答えになるようにカードを並べる焦点化によって,子どもたち全員の問題意識が変化していったのである。

2. 双方向のコミュニカーションができること

互いの考えを共有するためには,一方的に「伝える」だけではなく,「伝え合う」ということが必要になってくる。2年生での筆算の計算の仕方の授業を例に挙げてみる。



筆算の計算の仕方には「減加法」と「減減法」の二通りある。13－8の計算の方法を各自発表し合った。初めに発表した子は,減加法で計算したらしく一生懸命言葉で説明している。しかし,なかなか聞き手に伝わらないようである。そこで,別の子が「数え棒を使って説明してみたらわかりやすくなるよ。」と言ってくれた。数え棒を使って説明するのであるが,今度はみんな納得できない様子であった。発表した子は右図のように数え棒を操作していた。これでは,減減法になってしまうのであるが,筆算のときのように「3をひいて残りの5をひく」ようになっていないのである。「なんか変だよ。」「10の束からひいていないよ。」「8本を一度にひいているよ。」「どういうことだろう。」と学習が停滞してしまっている。そこで,「筆算のときは一の位から計算するんだよね。そうすると…」と問いかけた。「そうか。一の位からひけばよかったんだよ。」「10からひくときは10の束からひいて,残りを3と合わせればいいんだよ。」ということに気付いた。このように,説明に説明が積み重なっていくこと,すなわち,双方向のコミュニケーションができてこそ,聞き手に考えが伝わっていく状況が生まれると考える。

3. 対等な関係であること

対等な関係は,日々の学級経営により築き上げていくものであるが,授業の中でも対等な関係をつくっていかなければならない。いつも特定の子どもの意見に左右されてばかりだと,学び合いは成立しない。前述した授業の際も,初めから正しい筆算をつくれたわけではない。ある子は,12＋34とカードを並べた。答えのカードを並べるときに4のカードがもう一枚必要であることに気づき困っていた。その時,「全部やり直さなくても,上のカードを一枚替えてみたらできるかも。」と言った子がいた。その時,その子をしっかり評価した。そのことが,相手の意見を尊重する態度を育てていくことになる。

子どもたちが主体的に学び合う授業
～授業計画と役割の充実～

複式・理科
３・４年Ｆ組担任
中西　大



複式学級の授業には，子どもたちが司会や記録を行い，主体的に進めていくという大きな特徴があります。学習の基本的な流れを確立させ，それを十分理解して学習を進められるようにしています。本校複式部では，学びの基本的な流れを以下のように考えています。

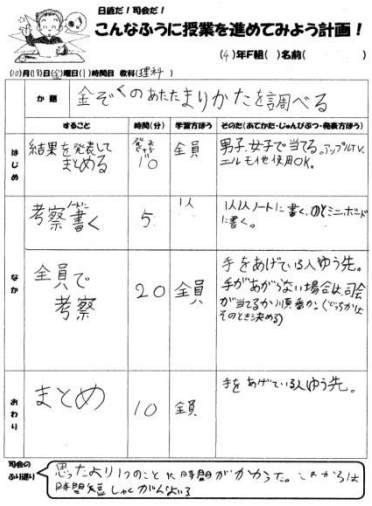
① 見通す…どんなことを学ぶのか，どのような結論を期待しているのか見通しをもつ。
② 調べる・考える…課題に対して自分で調べ，自分の考えをまとめる。
③ 確かめる…個々の結果や考えを出し合い，相手の考えに触れ，よりよい考えに高めていく。
④ 深める…学びを振り返り，自他の認識を更新する。

このような流れを身につけさせ，授業をスムーズに進行させるための取り組みを紹介します。

●司会者を育てる

授業や司会の計画を立てさせることで，課題解決の見通しをもたせました。学習の進め方，時間配分や発表方法，まとめ方などを司会者が計画するものです。授業後には，実際の展開と比較して振り返り，反省を次の授業に生かすようにしています。

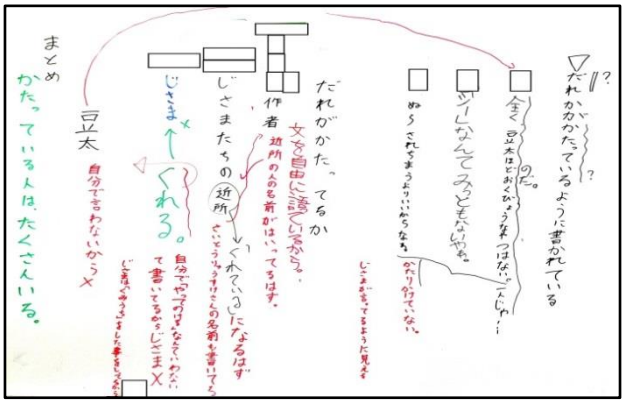
また，ある発言について関連する意見を求めたり，まとめたりできるような司会方法をマニュアル化して示しました。



●記録者を育てる

授業の記録が残ることで，子どもたちは他者の考えに触れやすくなり，教師は子どもたちの考えをみとりやすくなります。そこで，記録のスキルアップのために，スピーチ・発言・何気ない会話までも，短い文章でまとめてメモをさせました。

また，書くことに慣れるように，課題・数式・図・教科書の引用のみならず，自分の考えに加えて他者の考えもできる限りノートに書くようにさせ，丁寧なノートづくりの指導を行いました。



●発言者を育てる

相手の考えに寄り添い，自分の考えを進んで発言することで，互いが刺激されて学びが深まります。話す場合には，理由や根拠を示せるように意識させています。聞く場合には，相手の考えに深く触れるよう，重点的に指導しています。例えば，内容の正誤ではなく，「Ａさんの意見と似ていて，私も○○だと思います。」「Ａさんの意見とは違い，私は△△だと思います。」「ということは，□□と考えられますね。」など，それぞれの考えを幅広くつなげられるようにしています。相手が言おうとしていることを理解しようと努力し，同じように自分も考えられるようになってほしいと願っています。

●自分たちで評価する



授業のよりよい計画と改善のため，子ども同士で授業を参観し合う「ちびっ子参観」を行いました。子どもたちが互いに授業を見合うことで，子どもたちの言葉で評価され，改善されると考えたからです。

また，司会者・発言者スキルアップのため，下のような振り返りチェックシートを活用して自分で振り返らせ，子どもたちの意識を高めています。

聞き方テクニックパワーアップ！

★「考えながら聞く」ことが大切だよ。わかってあげような，自分も意見をつなげられるよう工夫して

- □ 話し手に体を向けて聞
- □ 話し手の目を見て聞こ
- □ さい後まで口をはさま
- □ 聞くことに集中しよう
- □ うなずきながら，表じ
- □ 話し手がつまった時の
- □ いいとおもうことをす
- □ しつもんをしたり，感
- □ 言いたいことをわかる
- □ メモは聞き終えてから

話し方テクニックパワーアップ！

★「聞かせる」ことが大切だよ。自分の意見を聞いてもらえるよう，工夫をこらして話し方テクニックをパワーアップさせよう！

- □ しずかに手をあげ，指名されてから話そう。勝手に話してはだめ。
- □ 聞き手に体を向け，みんなが聞いているかチェックしてから。
- □ 聞き手の目を見て話そう。
- □ ちょうどいいスピードと声の大きさで話そう。
- □ 言いたいことを短くハキハキとね。
- □ さい後までしっかり話すことが大切だよ。
- □ けつろんや立場を先に，理由は後で話そう。
- □ つなげる言葉を使って話そう。
- □ 友だちの考えにかんけいづけて話そう。
- □ 相手によびかけるように話そう。
- □ 何かを見せながら話すと分かりやすいよ。
- □ 伝えようという気持ちをこめて，やさしい言葉で話そう。

「いつでもあの海は」
～言葉からイメージして～

音楽科
５年Ｂ組
居澤　結美

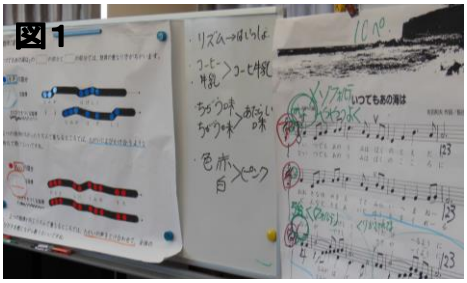


本年度から，音楽科の研究をさせていただくことになりました。音楽の教材研究をしているといつも新しい発見があります。今回，校内研究授業で行った『いつでもあの海は』もその発見があったひとつです。この教材は「３段目が“互いに呼びかけ合うような気持ち”で歌い，４段目は“互いの声を溶け合わせて，全体の響きを感じながら”歌う」とあります。このように“声を溶け合わせる”，“溶け合った響き”など，本教材にはこの“溶け合う”という言葉がよく出てきます。この言葉は，私にとって音楽ではあまり聞き慣れずイメージしにくく，とても引っ掛かった言葉でした。音楽でいう“溶け合う”とはどのような意味をもつのかを考えました。

「溶ける」は，液体に他の物質がまざって均一な液体になる。
「合う」は，２つ以上の物を集めて１つにする，重ね合わせる。
「溶け合う」は，２種類以上の物質がとけて入り混じり１つになる。とありました。

“混ざり合う”という言葉は，用いないのかとも考え調べてみました。すると，このような言葉は存在しませんでした。（新村 出　2008　岩波書店　広辞苑第６版）
＊“混じる（交じる・雑じる）”は，異質のものが加わって周囲に同化することなく存在すること。

「溶け合う」は**新しい１つのものが生まれ**，混じるとは，混じるものそれぞれが個々に存在するということになります。また，「“合唱”は多人数が２部や３部などに分かれて，１つの響きをなすように歌い合わすこと」とあります。本教材を通して，子どもたちには主旋律と副旋律に分かれて歌うだけではなく，その声が“溶け合う”ことで新しいものが生まれ，より高次なものとなることがとても大切なのだと，改めて合唱の意味を知ってほしいと考えました。そのために，はじめは「溶け合うように歌う」ということを子どもたちが考え，意味づけし，そして，歌い，比べることを通して互いの声が混じるのではなく，溶け合うことがすばらしいのだと感じ，その響きを味わってほしいと考えました。


図１

③の場面から

Ｔ：では今日の課題です。〈中略〉
“たがいによびかけあう（ウの副旋律）”と“とけあうように歌う（エの副旋律）”の語句の確認。互いによびかけあうってわかるね。
Ｃ：うなずく。
Ｔ：とけあうってどういうこと？
＊ペアで話し合う。〈中略〉
Ｃ１：宣伝でやってるけど，コーヒーとミルクがあって溶け合ってる。
Ｔ：コーヒーと牛乳を混ぜたらどうなる。
Ｃ２：カフェオレ。
Ｃ３：ちょっと同じでガムで言ったら違う味になる。（２つ合わせると）
Ｃ４：色合わせたら。
Ｔ：例えば？
Ｃ５：赤と白でピンク。
Ｃ６：合体のことになってる。
Ｔ：ということは，歌が，二人の声が重なるところは，新しい声（ひびき）ができているってことですね。今から新しいきれいなひびきになるってことを感じられるように，分かれて歌います。
＊各パートに分かれて，歌う活動に入る。

左記のような話し合い後，子どもたちは“溶け合う”という言葉のイメージをとらえ歌おうとしていました。

また次時では互いに歌い合う中で「“溶け合う”は新しい声ができるだけでなく，今までの声（主旋律・副旋律）もきちんとあるのがいい」「だってカフェオレもコーヒーの味もミルクの味もするもん。別の味やけど，前の味もあるから…」「そうそう！」という意見も出てきました。言葉の意味をとらえて歌うことでイメージが広がりより高次な気持ちや考えをもち歌えるのではないかと感じました。

このように扱われる言葉を大切にしながら，これからの学習を深めていきたいと思います。


図２

「体つくり運動　コンビネーションなわとび」

運動を創造する喜び，仲間とつながる楽しさを味わおう！

体育科
６年Ａ組担任
渡辺　圭



１．「コンビネーションなわとび」について

なわとび運動の特性は，なわを正確にタイミングよく操作したり，体の巧ち性や敏捷性を高めたりすることができるところにあり，学習指導要領にも用具などを用いた運動で紹介されています。

今回取り組んだ「コンビネーションなわとび」とは一人で跳んでいたなわとび技を，仲間と一緒に跳んだり，リズムに合わせて跳んだりするなわとび運動です。（図１，図２）この運動は今跳べる技で，跳ぶ人数を増やしたり，跳ぶ位置を変えたりすることにより，新しい技を生み出す喜びを味わうことができます。そして，リズムやタイミング，縄の動かし方などの観点から，仲間と息を合わせることが重視されるため，ペアや集団のかかわり合いが技能向上の鍵となる運動でもあります。

「どうすればうまく跳べるのだろう」と考えながら仲間とかかわり合って，コツの発見や失敗と成功の体験を共有し，動きを高めていくところに「コンビネーションなわとび」を取り上げる意義があると考えました。うまく跳び続けるためには，「相手のことを考えて」縄を回すことが大切です。仲間を思いやる心が育てられる教材だと思います。



トラベラー（図１）



ホイール（図２）

２．授業の実際（第１時～第２時）

はじめに意欲喚起と技のイメージをもたせるため，「トラベラー」「ホイール」の動画を視聴しました。子どもたちの表情からは，興味や意欲が見てとれました。そこで早速，２人に１本なわとびを渡し，２つの技に取り組ませました。トラベラーについては，やったことのある子どもも多く，すぐにできていましたが，ホイールについては，難しそうにしている様子が見られました。しかし，どのペアも声をかけ合って良い雰囲気で取り組むことができていました。

第２時からは，めあて①で「技の習得」を，めあて②「新しい技，動きの工夫」に取り組みました。めあて①では，合図となる「声」をかけ合いながらするとうまくいくことに気がついた様子で「ホイール」も目に見えて上達していきました。めあて②では下の表のような色々な工夫が見えました。

トラベラー	・大人数で，次々に縄へ入っていく。　・前と後ろに入って３人でとぶ ・後ろ回しにする。など
ホイール	・持ち手を変える。　・後ろ向きでとぶ　・途中で体の向き，縄の方向を変えるなど

子どもたちは「縄や相手の動きにタイミングを合わせる」というなわとびの特性を十分に感じながら楽しく取り組み，失敗しても，笑顔が見え，良い雰囲気で活動ができていました。

３．校内研究授業から見えた課題（第３時）

第３時では新しい技「チェンジ（3 人でターナーを交代しながら跳ぶ技。」に取り組みました。動画を見ながら動きを確認しましたが，中々うまくできない様子が見えました。その中で「はい・とん・てき」というおもしろい掛け声で，スムーズにできているグループがいました。

授業の最後に，そのグループに「はい・とん・てき」の掛け声で「チェンジ」の技を発表してもらいました。見ていた子どもたちからは，技のできばえ，楽しそうな雰囲気がよかったという意見が出ました。自分はその時に，次の発表へ進んでしまったのですが，授業後の協議会で，「はい・とん・てき」をみんなのものにする支援が必要であったとご指摘をうけました。「このグループがなぜうまく行ったのか」を探っていくところにこの時間の体育の学びがあったと感じました。

４．最後に

コンビネーションなわとびに取り組んで，一番に感じたことは，身体能力の差にかかわらず，全員が 45 分の活動を楽しめたことです。しかもペアとのかかわり合いによって，技がどんどん身について行くことを実感できたと思います。単元の終了後，集会でも発表したいと言う声があり，今も休憩時間にコンビネーションなわとびに取り組んでいます。縄一本で取り組めるコンビネーションなわとび，ぜひお試しください！

作図の技能を養う活動
～自分のノートを写すことで～

算　数
２年Ａ組担任
小谷　祐二郎



１．作図の習熟の必要性

算数科では，特に計算領域において習熟を図る学習がさかんに行われます。わり算の筆算等の計算の手順はしっかり覚えないとできるようになりません。その意味でも習熟を図る学習は大切だと言えます。しかし，他領域では習熟を図る学習を計算領域ほど行っていないように思います。計算は定着しているか否かがはっきりと分かりますが，作図はある程度の誤差を許容にする等自分自身のこれまでの指導にも曖昧さがあったように思います。

２年生では「長さ」で初めて 30cm のものさしを扱い，ここで直線の作図の学習をします。子どもにとって初めての作図の学習ですが，教科書での扱いはあまり大きくありません。そして，子どものノートを見ると図１のような直線がたくさんあります。直線自体はうまくかけていますが，思ったところにかくことができていないのです。ノートを見た時には，「これではいけないから，もっと練習させよう。」と思うのですが，結局完全に定着させられないまま見過ごしてきたこれまでの反省がありました。そして，「作図にも，もっともっと習熟を図る学習が必要だ。」と感じていました。

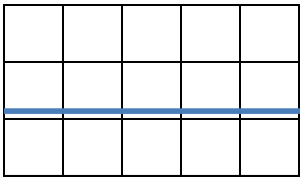


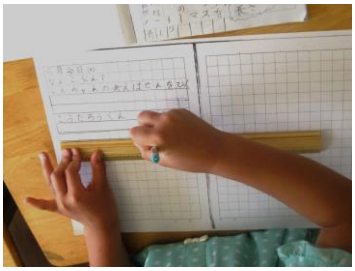
図１

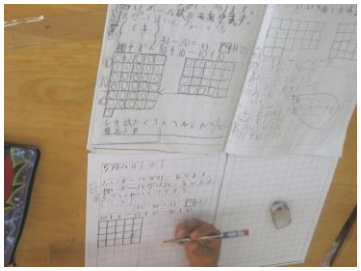
２．直線の作図の指導で大切にすること

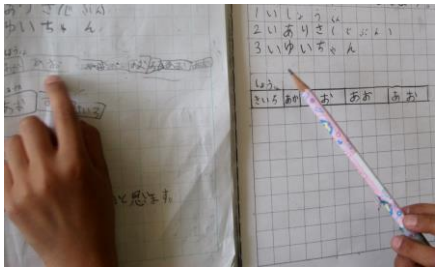
直線とは点と点を結んだまっすぐな線です。教科書でも２点を結ぶことが必ずかかれています。しかし，子どもは直線をひきたいところに直接ものさしを合わせにいきます。直接ものさしを合わせにいくと，実際にかきたいところより上に直線をかいてしまいます。ここで，必ず子どもに指導すべきことは，「点に鉛筆をおき，その鉛筆に対してものさしをあてにいく。」ことです。子どもは少々面倒に感じるかもしれませんが，この指導なしでは思ったところに直線をかくことはできません。実際の授業では，図１のような直線を実物投影機に写して提示すると，「ものさしはちょっとずらして置かなあかんのやな。」という声が上がりました。そこで，「いいことに気付いたね。でも，その“ちょっと”がどれだけかがよく分からないもんね。」と返し，毎回必ず鉛筆を点に合わせてからものさしを合わせにいく必要性を繰り返し指導しました。

３．きれいにかけたことがより実感できるために

ものさしを使って直線をかく学習を行った後，『自分の算数ノートを振り返ろう。』と題して，直線の作図の習熟を図る学習を行いました。啓林館の教科書では，「長さ」の学習前に「ひょう・グラフと時計」「たし算とひき算」を学習しています。これらの学習の中で子どもたちはノートにひょうをかいたり，２桁の数をアレイ図に表し，計算するため分解したことを□で囲んだりして表現しています。それらのノートを振り返り，「自分のノートで，『ものさしを使うともっと上手にかけたのに』というページはある？」と投げかけました。子どもたちからは当然「ある～！」という声が返ってきました。そこで，自分のノートを写す活動を行いました。（下図）



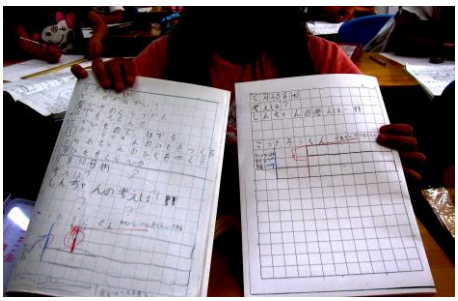




４．ものさしの有用性に気付いた子どもたち

ものさしを使わずにかいた線とものさしを使ってかいた直線の違いは子どもたちが見ても明らかで，「めっちゃきれいになった～！」という声があちこちから聞こえてきました。この学習は休憩時間になっても終わらず何ページも写す子どもも見られました。この経験を通して，どの単元においてもものさしを使って直線をひく子どもを認めながら増やしていきたいです。

＊注　本稿では，ものさしの定規の機能を使って直線を引いていますが，すべて「ものさし」と表記しています。



思いついたこと何でも言ってみよう
～4年「対話による鑑賞」～

図画工作科
４年Ｃ組担任
上田　恵



★「対話による鑑賞」とは

皆さんは美術館で作品を観るとき，どんなふうに鑑賞しますか。まず解説を読み，作家の背景や時代を頭に入れてから作品を観て，次の作品へと進みますか。では，歌を聴くときはどうですか。私は作家の背景や時代，意図などはあまり考えないことが多いです。「元気になれる曲だな」「落ち着くなあ」「これ，好き」などと自分の感覚重視で聴きます。ならば，美術作品も自分の感覚重視で鑑賞する方法も「あり」ではないかと思いませんか。子どもたちともっと自由に美術作品を鑑賞したいと考えました。そこで，美術史家アメリア・アレナス氏の提唱する「対話による鑑賞」を取り入れることにしました。

★「思いついたこと何でも言ってみよう」

「絵を見て話して感じて考えよう」　～子どもたちへのねらい～

今回は，教室で行ないました。教室の前半分を広くし，子どもたちを集めました。今回鑑賞する絵画作品を，プロジェクターを使って黒板のスクリーンに映し出しました。

今回鑑賞したのは，明治のころに活躍した浮世絵師，橋本周延の「真美人」という作品です。

「まず黙って１分間この絵を見てください。この絵の中で何が起こっているのかな。何があるのかな。」

１分後，ワークシートに思いついたことを何でも書きます。

その後，みんなで思いついたことを話し合いました。



橋本周延『真美人』

★日傘か雨傘か…

子どもたちが初めに注目したのは“傘”でした。

「傘を差してるから雨が降っているか，陽射しが強いかのどっちかだと思う。」「黒いしがらがついているから日傘だと思う」「雨の日に本を持って出かけないと思う」「着物が濡れたらたいへんやから雨じゃないと思う」「腕に日除けみたいなのをしてる」「それは日除けじゃなくて，首の所からも見えてるからつながってる服やと思う」

子どもたちの経験の中には，日本の番傘か洋傘かという選択肢はなかったのでしょう。日傘か雨傘かを絵の中に手がかりを見つけながら話し合いました。

★「人美真」という文字は…

傘の次に話題に上ったのは，この作品の下に書かれた「人美真」という文字です。

「昔は右から書いたって前に教えてもらったことがあるから，これは『真美人』と思う」「題名と思う」「町を歩いていてこの人がこんなに呼ばれてると思う」「真実の美人やから本当に美人ってこと？」「昔の美人でお化粧してる」「本持ってるからわんぱくじゃない，大人しい人や」「百人一首に出てくる人みたい」「姫や」「顔が真っ白で怖い」「今やったら祭りとか墓参りの時くらいしか着物って着ないけど，これは昔やから着物を着てる」「今やったら美人じゃないけど，坊主めくりやった時こんな顔の絵見た」

前学年で学習した百人一首を思い出したり，自分の生活経験と照らし合わせたりして，自分なりの鑑賞を深めました。

★対話による鑑賞で，伸ばす力

対話による鑑賞では，作品の中に自分なりの根拠を持ち，「僕にはこう見えた」「私はこう思った」という感覚を大切にします。そして，友だちの意見や感想を聞いて「自分はこう思っていたけど，やっぱり…」「みんなはこう言うけど私は…」と自分の感覚と照らし合わせて作品ともう一度向き合います。

こんなふうにいわば自分の感覚重視で美術作品の鑑賞を楽しんでみませんか。